
仇。

八水 原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仇。

【Zコード】

Z6943A

【作者名】

八水 原

【あらすじ】

気付けばそこは地獄だった。いつも一緒に居て、バカばっかりやつてた友達も、今じゃただの塊。何があつたか理解できたもんじゃない。意識が遠のく中、目を凝らし、状況を把握しようと必死だった。

#00・前夜（前書き）

流血系がダメな方は見ないほうがいいかもしません(^_^ ;
一応ジャンルは学園モノ？

路地裏に佇む人影。

数十年前に見る写真のような、セピア色の髪。

何かを見下ろすその虚ろな目は、何かをやり遂げて落ち着いている
ような目。白い制服姿ではあるが、その白い布地には、どす黒く、
赤い模様がついている。

不規則に散らばったその花は、服だけでなく、壁や地面、落ちてい
るタバコの吸い殻にさえも反映していた。

返り血。

不似合いなその姿が手に持つ物。路地裏の闇に包まれながらも、妖
しく光る。

刀。

なぜこんな少女が、刀を？

その理由を考える暇も与えられず、俺の目の前は赤く染まつていっ
た。

最後の力をふり絞り、両手をついて立とうとする。

地面上に手をつく事は出来なかつた。

そうだ、俺に腕は無かつたんだっけ…。つこせつき失つたんだよな。
なんでこんな事になつたんだろう…

俺の脳裏に光る二文字。

復讐？俺が復讐をするのか、されてるのか。
よく分からないな…

#00・前夜（後書き）

初投稿の力無き物語の前触れでした。笑　　えっと、一応本編は学園系の流血沙汰な雰囲気かもち出す予定ですが、少々暴力な感じになるかもしれません　　あー、結局は独り言になるんでしょうね、ここ（笑）　　感想とか貰えたらやる気です（笑）

#01・変わらない流れ

わずかに開いたカーテンから差し込む光。どこか柔らかく、いつまでも見ていたくなるようなもの。その光は、都合よく俺の顔を覆っている。

朝だ。

うーん、と少しずつ覚ると、右手をベッドの下へ伸ばし、何かの手触りを感じる。

まだ鳴っていない目覚まし時計。デジタル表示で、6：32を表している。いや、5：32…？

デジタルの短所はこれだ。電池が無くなつてくれれば、すっかり力が無くなつて時間をハツキリと教えてくれない。

5か6か。

ダイスの田は6と出た。6マス先にあるイベントマス。

『一回休み』

やがて俺は、今日が日曜日、即ち休日の午前6：32であることに気付いた。

正確にはコレ、4分遅れてるんだけどさ。

機械つてそんなモンだろう? もう何年もこの時計を睨み続けてきた。

8年…いや、9年?

ダイスの田は8と出た。俺の短所はこれだ、すぐに何でも忘れちまう。まだ17歳の学生だってのに、ボケてきたかな?

俺は欠伸をしながら目を擦り、上体を起こしてやつた。

「ああ…眠い…」

休日に限つて早く目が覚めるのは嘘そうだろ？

欠伸混じりの俺の声は、授業中に聞こえてくるヒソヒソとした声のようだった。 あいつら、周りに聞こえてないとでも思つてんのか？逆に聞こえてしまふ上に、聞きたくなるんだよ。その上、大抵が他人の悪口だ。聞いてるとイライラする。

『そ』行が特に聞こえる、嫌な具合に。

それから一言も口にせず、ベッドから降りた。
黄緑色のカーペットは硬く、踏み慣れた環境。

そのままゆっくつと窓際へ向かう。差し込む光に照らされた床を舞う塵は、窓の外へ出たそうにウズウズしてる様子だった。半開きのカーテンを開け、そのまま窓を開ける。1m幅の小さめの窓。マメに掃除してたから、汚れは目立たない。その代わりに、左下。縁の方からヒビが入つてて、かなり目立つてる。

カーテン、窓を開けて朝の日差しを浴びる。

誰しも一度は憧れた朝の迎え方だろうな。俺の部屋からだと毎朝味わえるぜ。羨ましいか？

外から入り込む風を浴びながら、前寄りになつて体を支えている両腕を見る。日差しのせいで金色に輝いて見えた。まるで金箔ベタ張り。

小さく息をついた後、部屋に飛び込んだノックに気付く。

俺が振り返ると同時にドアが開き、見慣れた顔が小さく覗きこむ。

「あ…珍しく今日は早いんだね」

ああ、と俺が言つ。

おかしいな、この流れは…

「今日ね、お父さん仕事だから、コウジの面倒見とけって言われたの」

…言つとくねど、「コイツは俺の妹だ。

…名前？そんなんどうだつていいだろ。とにかく、面倒見られるのはコイツだ。俺は兄、コイツは妹。上と下だ。ちなみに俺の名前は浩治。たまに名前書く時、浩浩つて書いてしまう場合がある。ややこしいよ、全く。

…で、その面倒見役が用事でも？

「つづん、ただ、何してるかなーって…」

妹は下を向き、小さめの声でそう言つた。

やつぱつこの流れは。

「なあ」

唐突に口を開いた俺に、少しひクつとした感じで、妹は顔をあげた。

「なに？」

「お湯、沸騰してるんじゃないか？」

キヨトンとした表情だったが、急にハツとなり、ドアを閉じ駆けてゆく。

沸騰。

しばらくすると妹が戻ってきた。

「す、いね、兄。なんで沸騰してるつて分かったの？」

…やはり。

腕を組み、横を向く。

「今日何日？」

妹の問い合わせに答えず、質問を質問で返し、カレンダーを睨みつける俺。

「8日。5月のね」

…このカレンダーを見るのは、毎日。毎朝。毎晩。日課だ。

その日の日付だって覚えてる。カレンダーが好きって訳じゃないけどな。

で、俺の記憶が正しければ、最後に日付を確認したのは。

5月13日。

そう。

5日後だ。13日は何があったかさえも覚えて……
日付を確認して、学校に行って。13日の金曜日ってことで盛り上がり。学校帰りに寄り道して。

ねえ、どうかしたの？

それから……

ねえつてば、兄。

それから……

おーい？

「ん……何？」

人が考え事してる時に話かけるなよ……

「さつきから何か悩んでるみたいだよ？なにかあった？」

俺はなるべく気にさせないような口調で言つた。

「ああ、別に何もないよ。それより、腹減ったな」

#01・変わらない流れ（後書き）

2話目になりますね。なんか文章が自分の性格丸出しなんです
が：（笑）完結できるまで、仲良く（^_~）してもいいんと幸い
です。

#02 · 或いは、過去

俺が振り返ると同時にドアが開き、見慣れた顔が小さく覗きこむ。

「あ…珍しく今日は早いんだね」

ああ、と俺が言ひ。まだ寝ぼけているような声に、その顔は微笑した。

「今日ね、お父さん仕事だから、『カジの面倒見とけって言われたの」

…言つとくけど、コイツは俺の妹だ。

…名前？そんなんどうだつていいだろ。とにかく、面倒見られるのはコイツだ。俺は兄、コイツは妹。上と下だ。

ちなみに俺の名前は浩治。たまに名前書く時、浩浩つて書いてしまう場合がある。ややこしいよ、全く。

「…で、その面倒見役が用事でも？」

「うん、ただ、何してるかなーって…」

妹は下を向き、小さく呟いた。

実はこの妹、兄である俺に気があるらしい。「冗談じゃないよ、俺はコイツのハッキリとしない性格はあまり好きじゃない。弱いといつか…

「あ…でも何で今日は早かったの？」

俺が知る訳がない。最初から起きよつとも思つてなかつたんだし。

「んや…なんでだろうね…」

ううと、と俺が背伸びをしながら答えると、妹は、何やら気に食わなさそうな顔をした。

「彼女とデート…とか？」

彼女。俺には全く縁のない言葉だ。その理由は妹にある…詳しく述べなくてもいいだろ？

「ねーよ」

「そ。わかつた」

安堵の息を漏らす妹。

飾り気のない、肩下まで伸びた黒い髪。母親似の綺麗な一重。そのパーツが組まれた小顔には、親父の面影はなかつた。どこを取つても母親似。

「…？」

何か臭いがしたのか、妹はあたりを見回し始めた。クンクン、といふような仕草だ。

「ああーっ！！」

驚いた。長年の付き合いだが、これ程までに急なものは初めてだ。暗闇からクラッカーを鳴らされたような気分。

「どうした？」

俺の質問に答えることなく、妹は部屋を飛び出していった。
「火、点けっ放しだつたああつ…………！」

「兄？」

妹が顔を覗きこんできた。

ハツとなり、俺は辺りを見る。よく掃除されたフローリングの部屋に、ガラス製のテーブル。このテーブルはもう古いが、奇跡的にビビは一つも入つていない。昔から見慣れてきたテーブルだ。

その上には、よく磨かれた純白の皿。綺麗好きなのは妹で、そこも母親似だった。

いい匂いを放つ物が一つ。

「さつきから変だよ……？兄……」

心配そうな表情。

俺が黙つたまま居ると、頬を突つ突いてくる。

「早く食べないと、冷えちゃうよ」

うん。と呴くと、皿の上にある田玉焼きに箸を。

妹は小さく首を傾げると、キッチンへ戻った。湯気のたつ田玉焼きから目を離し、妹を見る。

鼻歌を口ずさみながら、沸いたお湯をカップに注ぐ姿。俺の視線に気付いたのか、一旦手を止め、こっちを向く。

「もうすぐで火事になつてたかも。ありがとね、兄」

今日、キッチン燃えてたんだよな。本当なら。

朝食を済ませた後、暇になつた俺は、再び部屋に戻つた。勿論、自分の食器は自分で洗つたさ。

「間違いない… 5日前だ」

5日後…つまり13日。その日までを、俺は確かに経過させている。経過させたし、その中に居た。

今日、妹がうつかり小火起こしてしまつことも分かつていた。これをどう説明しようか？

デジャヴってやつか？

或いは、予知？

違うな。

『巻き戻つた』んだ。

#02 · 或いは、過去（後書き）

はい、一人でテンション上がっちゃつてます（笑 読んでくれてる人居るのかなあ… 一話一話が短い；

#03 · 新規メモリ（前書き）

勝手にテンション上がつて書いてます（笑

続きますかな？笑
これがいつまで

#03・新規メモリ

机の上に何の考えもなく置かれた、リモコン。巻き戻し、という文字が目に入った。

この先5日間の記憶。今日の夜食った飯だって覚えている。妹が作った飯はうまいからな…

一体俺はどうしたんだ？

今、限り無く理解不可な状況に陥っている。これについて考えることは、昔起きたことを思い出すようだった。走馬灯のよ。

テレビに、1時を回った事を知らされた。

考へても仕方あるまい、5日後に何か分かるはずだ。

俺の一年は375日。

それでいい。

生憎、難しい事を考へれる脳の持ち主じゃないんでね。
さあて…今からどうしよう。

と、考へるのをやめた時、ベッドの頭もとに置いてあつた携帯がなつた。

「…」

俺は黙つてそれを手にとり、発信者名を見た。

「090……」

見覚えのない番号だつた。

通話、と示されたボタンに親指を乗せたまま、じばらく黙る。

切れる気配はなかった。

俺は縁に光り、アピールしきつているボタンを押し、小さな穴を耳元へ。

携帯つて…

便利だよなあ。

「もしもし」

と、声を出したのは俺ではなく、相手が先だった。慌ててこちらも口を。

おかしいな…あの時は電話なんて…?

「も…もしもし?」

「窓から外を見るんだ」

女の声…?いや、どこかがおかしい…変声機か?
「え?」

「いいから窓から外を見るんだ」

何のことだ?いきなりそう言われけりゃつても参る。頭の中、整理させろよ。

「早く」

声に急かされて、俺は仕方なく窓から顔を出した。従わねばならぬ気がしたのだ。よくわからないが、そう感じた。
俺から見て左、商店街から突き抜けた交差点の下。ミラーの影に人がいる。

赤いニット帽を被り、黒いジャケットとジーパン。なんて服装だ:
ギヤングかなんか?

「あれ…アンタか?誰なんだよ」

「残念ながら私じゃない。ただ、その男に気をつけなさい……」
そう言うと、ブツツといつ音をたて、通話が終わった。

2分17。

一度田の今日には、こんな電話はなかった。

二度目の今日に、初めて掛かってきた電話だ。

その時は気付かなかつたが、携帯を握り窓に背を向けた俺の手は、微かだが、震えていた。

気をつける。

何をどう氣をつければいいんだ？

急に携帯が鳴り、誰かもわからない奴に指示された。
意味わからねえ。

どうせイタズラだろ。俺もよくやつてた。じゃんけんで負けた奴が、自分の携帯から適当な番号にかけ、なぞのセリフを残すといつ、今思えばなんてガキじみた遊びだつたんだろうか。

俺は体の震えに気付くことなく、部屋を出た。頭の中には何も考えられてなかつた。

「あれ、兄。寝てたの？」

ソファーに座り、テレビを眺めていた妹がいつた。

テレビでは『痩せるブロッコリー』という話題を取り上げた番組があつていた。ブロッコリーが痩せるのか？

「ああ……一度寝してた」

「で、やっぱり今日どつか行くの？」

「本屋行ってくる。すぐ帰るよ」

ジーッと俺を見ながら、ふーん、と呟く妹。

そんな視線を背に感じながら、俺は玄関へ向かつた。
見慣れた場所、踏み慣れた靴。

靴紐の長さが左右で一致しないが、気にしない。

いつてきまーす、と小さく呟き、太陽の光が差し込む世界へ歩き出した。

一度送った日々、これとまた違つ日々を改めるのも楽しいだひ。

わくわく踏み出す、右、左。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6943a/>

仇。

2011年1月6日02時07分発行